

壺園の男

都営小平霊園は、新青梅街道と西武新宿線にはさまれた三角形の区画の中にある。車で訪れるには新青梅街道をいけば簡単だが、霊園内には花屋などがないため、墓参の場合、小平駅周辺の売店に寄る必要があった。

花と線香を買った鮫島が、間野総治の墓所の前に立ったのは、午前十時を少し過ぎた時刻だった。

よく晴れた火曜日で、澄んだ空気を小鳥の鳴き声が満たしている。花を手向け、線香に火をつけて、手を合わせた。

間野の命日には少し早かったが、非番の今日、こられるうちにきておこうと考えていたのだ。

しばらく墓所の前でたたずんだあと、鮫島は停めておいた車に戻った。

男がひとり、そのかたわらに立っていた。年齢は四十前くらいだろうか。濃いグレイの

スーツを着て、白いシャツにネクタイを結んでいる。

「鮫島さんですか」

まっすぐに鮫島を見つめ、声をかけてきた。鮫島は足を止めた。かすかに訛があった。

「そうですね」

「間野の息子です」

男はいつて、軽く頭を下げた。鮫島はわずかに息を呑んだ。

間野が結婚していたのは知っていた。一九四七年生まれの間野は、十八歳で警視庁警察官に採用され、二十二歳からの十年間、公安部公安一課に勤務していた。その間に結婚し、一子をもうけたが、一九八〇年に離婚している。一九七九年、公安一課分室、通称「サクラ」に転属となった間野は一九八五年、国外での職務遂行中に失踪した。

鮫島が間野に初めて会ったのは、それから十年以上もたつてからで、日系ブラジル人の「ロベルト・村上」を名乗っていた。その後、仙田、深見という偽名を使い分け、昨年、自らが設立した盗品故買市場を広域暴力団稜知会に乗っとられた。そして外国人犯罪者を排除する目的でその動きを助長させたとして、当時警視庁組織犯罪対策理事官だった香田を憎み、射殺しようとした。

それにはもうひとつ、目的があった。警視庁警視正と日本最大の暴力団のあいだで交さ

れた「密約」を暴き、無効化させる狙いだ。

間野は、警護の暴力団員ひとり射殺し、ひとりに瀕死の重傷を負わせ、香田に銃口を向けた。

鮫島はそれを止めようと、一発を撃ちこんだが、間野はひるむことなく、香田を狙った。やむなく、鮫島は二発をさらに撃った。間野は死亡した。

間野の葬儀に、前妻と子供は出席しなかった。通知はしたが、警察官から国際犯罪者へとその立ち位置をかえた、かつての夫、父とは、もはや無関係である、との返事がかえってきただけだった。

「あなたが」

鮫島は男を見つめた。

「矢吹といいます。矢吹は母親の姓です」

男はいった。色白で、端正な顔立ちをしていた。色黒で、目立たない風貌だった間野には、あまり似ていない。

「葬儀の案内をおだしたのですが」

矢吹は頷いた。

「申しわけありませんでした。昨年、私は仕事で海外に赴任していて、母親が断わつたと

あとから聞かされました」

「そうですね。海外は、どちらに？」

「シンガポールです」

矢吹は答えた。鮫島は我にかえった。

「お父さんのお墓は、その——」

「知っております。先ほど参りました。墓所の費用をだして下さったのは鮫島さんだそうで、ありがとうございます」

矢吹は頭を下げた。鮫島は首をふった。

「とんでもありません。せめてそれくらいのことしか、私にはできなくて」

言葉を止めた。その先を何とつづけたらよいのかわからなかった。疎遠になり、犯罪者であったとしても、目の前にいるこの男の父親を、自分は殺したのだ。

無言のまま、目を合わすこともなく、鮫島と矢吹は立っていた。さっきまで軽やかに美しくさえずっていた小鳥の鳴き声が止んでいる。

「両親が離婚したとき、私は六歳でした。離婚後一年くらいは、父と会う機会もあったのですが、私が小学校高学年のときに音信不通になってしまつて。それきり会うことがなくて、去年亡くなったと聞いても、実感がまるでわきませんでした。ただ、刑事さんに撃た

れて亡くなったというのには驚きました。父親は警官だった筈なのに、どうしてそういうことになってしまったのか、と」

鮫島はそつと息を吐きだした。

「お父さんを撃つたのは、私です」

矢吹の目が鮫島の目を見つめた。

「はい、知っています。日本に戻ってから、新聞や雑誌の記事を検索しました。父は、ふたりを死傷させ、さらにその場にいた警察官を撃とうとした。鮫島さんはそれを止めようとして撃つた、と」

鮫島は静かにいった。

「私は、お父さんと、何度か会ったことがあります。正直なことをいいます。最初に会ったときには、お父さんはもう犯罪者でした。私は警官として、追う側に立っていた。しかし、昨年のあの事件が起きるまで、奇妙なようですが、お父さんに対して悪意はもっていませんでした。自首してもらいたい、と告げたことがあります」

「なのに撃ち殺したのですか」

鮫島は奥歯をかみしめた。

「そうです」

矢吹が息を吸いこむ音が聞こえた。

「私の覚えている父は、信念の人でした。警官だったときも。その人がなぜ、同じ警官に撃たなければいけないのか、どれほどたくさんの記事を読んでも、そこには書いてないんです。記事にでてくる父は、まるで手負いの獣で、誰彼かまわず、人殺しをしそうだった。だから射殺されて当然だ、という調子で」

「お父さんが絶望されていたのは事実です」

「泥棒市場を作り、それを暴力団に乗せられた、と書いてありました」

「ええ」

「それが理由で絶望したのですか」

どこまでを話すべきか、鮫島は迷った。だが、間野の息子には、真実を知る権利がある。

「他にも理由は、あります」

「何ですか？」

「暴力団による乗つとりを黙認した警察官がいました」

矢吹は首を傾げた。鮫島は言葉をつづけた。

「お父さんは、長いこと、アメリカや南米におられた。そこで犯罪組織とのつながりができたわけですが、きつかけは、警察官としての職務でした」

矢吹は理解できないというように眉をひそめた。

「詳しいことは明らかになっていないのですが、アメリカの情報機関の協力者として麻薬組織などとかかわりをもった。その結果、あと戻りできない状況になったのではないかと、想像しています」

「じゃあ、国のために犯罪者になったということですか」

「犯罪、と見なされる活動も、職務としておこなったのは事実でしょう。ただ職務が終われば、その世界から離れることができた筈だと私は思います。しかし、そうしなかった。おそらくですが、この世界の、どこまでが悪で、どこまでが善なのか、ひどくあいまいな領域に長く身をおいた結果、独特の倫理観をもつようになった」

「どんな倫理観なんです？」

「倫理観というよりは、理想、といったほうがいいかもしれない。あるいは信念。いずれにしても、お父さんは、日本にいる外国人犯罪者を束ね、国内の暴力団に拮抗しようとする組織を作ろうとしていた。失敗すると、国外に脱出し、また新たな計画を準備して戻ってくる。その組織の規律は非常に厳格で、麻薬取引に手をだしたメンバーを“粛清”したこともありました」

矢吹は歪んだ笑みを浮かべた。

「あなたは、父を、どうしてもひどい犯罪者だったと私に納得させようとしているみたいだ」

「そうではありません。お父さんが絶望した理由を理解していただきたいと思っただから説明したのです。かつて警察官だったお父さんは、海外で自分の立ち位置を見失い、自らのルールをもとに犯罪組織を作った。ところが今度はそれを、古巣である警察の人間と暴力団が組んで奪った。その警察官は、お父さんとは正反対で、この国からあらゆる外国人犯罪者を排除しようと考え、そのためには日本の大型暴力団に一時的に地下経済の管理を任せるのが効果的だと思いついた。外国人犯罪者が利益を得られない地下経済の仕組みを作れば、彼らは日本をでていくだろう、と」

「そんな簡単にいくのですか。いや、かりにいったとして、そのあとはどうするんです」

巨大化した暴力団は

「自分たちは国家権力だと、その警察官は考えていました。法律をかえれば、いくらでも暴力団を弱体化させられる。したがって、外国人犯罪者を排除した暁には、暴力団を次の標的にすればいい」

「じゃあその人の思い通りになったわけだ」

鮫島は首をふった。

「そんな計画がうまくいく筈はありません。確かに警察は国家権力を担っている側面があるかもしれませんが、暴力団も馬鹿ではない。思い通りに排除などできるわけではない。その点に関して、私はその警察官とは反対の考え方をしていました。いや、それより何より、警察が暴力団と密約を結ぶなど、あつてはならない、と思ったのです」

「父が撃とうとしたのは、その警察官の人だったのですか」
「そうです」

「その人は今、どうしているのですか」

「警察を辞めました。表沙汰にはなりませんでしたが、事情が明らかになり、警察にいられなくなつたのです」

矢吹はゆつくりと首を巡らせた。霊園の木立ちを見ている。

「父のそばに、女性がいたと聞きました。それも中国人の」

鯨島はわずかに間をおき、答えた。

「いました。日本名を明子という女性です。お父さんはその女性を信頼し、泥棒市場の重要な役割を任せていた」

「その人は、愛人だったのですか」

「ちがつっていたようです。そういう意味では男女の関係にはなかつた。大切にしていたの

は事実のようですが」

「その女の人が裏切つたのだそうですね」

「どこでそれを？」

「週刊誌だつたと思います」

「お父さんからすれば、そうだったかもしれません。市場を乗つとつた暴力団幹部とつきあいが生まれ、そこでの仕事も任されていた」

「父はコケにされたわけだ。大切にしていた女とビジネスの両方を暴力団に奪われて」

矢吹は悲しげにいった。

「そうかもしれません。ただ、その暴力団幹部も、彼女のことをそれなりに考えていました。発砲が始まる直前、彼女にその場を離れるよう、お父さんもその幹部も命じていた」

「そうしたのですか」

「いや」

鯨島は首をふつた。

「彼女はでていかなかった。その幹部に惚れていて、殺されても刑務所に入れられても、その場にとどまる、といい放つた」

矢吹の表情がわずかに歪んだ。

「父の前で？」

鮫島は頷いた。

「憐れだな」

矢吹はつぶやいた。そして鮫島を見つめた。

「そう、思いませんか」

鮫島は無言だった。肯定すると、どこか死者を侮辱してしまうような気がした。

「自暴自棄になったとうけとられてもしかたがありませんね、それじゃ」

「お父さんは冷静でした。警察官に銃口を向ける直前、ある質問をしたほどです」

矢吹の目が青空に向いた。

「バリケード封鎖をされた大学構内で、誰かがお前を警察のイヌだといったら、どうやってその場を逃れる？」

抑揚のない口調でいった。鮫島は矢吹の横顔を見つめた。

「小さい頃、何度も聞かされました。お前なら、どうする、と」

「お父さんは答を教えてくださいましたか」

「いや」

矢吹は首をふった。

「教えてくれなかった。父が実際にそういう目にあつたかどうか、私は知りません」

鮫島は小さく頷いた。

「小さなお子さんに話して聞かせてもわからないと思つたのかもしれませんが」

矢吹が鮫島に目を戻した。

「父の最期のようにすを教えてください」

鮫島は奥歯をかみしめた。

「その質問のあと、お父さんは警察官に銃口を向けました。答える、と。まちがえれば、

あんたは殉職する」

矢吹の目が鋭くなった。右手が上着の中にすべりこんだ。

「警察官の答はこうでした。『そんな問題に正解などない。こうすれば助かるとわかつているなら、誰もがその答をいう。そしてその結果、スパイであるかどうかの問いなど意味をなさない』」

矢吹の右手が煙草たばこの箱とライターをつかんで現われた。一本抜きだし、煙草の箱をもつたままライターで火をつけた。

「父は何と？」

「『正解だ。だがそれを知らされずに送りこまれた多くの者がリンチにあつた。命を失い、

あるいは体のどこかを失って、それでも警察という組織を信じて、ぶら下がりとつづけた。なのにお前は、その警察という組織を汚泥にまみれさせようとしている。正解を知っているがゆえのその愚行は万死に値する」

「そっくりそのままいったのですか」

冷たい風が吹きぬけた。矢吹の唇から煙が真横に流れた。

「一字一句そのままです。忘れることはないと思います」

「そして撃った？」

鮫島はつい、目を閉じた。だがすぐに開いた。矢吹の視線を逃れてはならない、と思ったからだ。

「直後、ひとりの暴力団員がお父さんにとびかかろうとしました。その男を二発撃ち、お父さんは警察官を撃とうとした。私はそのとき撃ちました」

「それで死んだのですか」

鮫島は首をふった。

「お父さんはよろけながらも、『まだだつ』と叫んで、狙いを外さなかった。そこで私はさらに二発撃ちました。それが致命傷になりました」

「その狙いは、あなたにですか」

「いえ。もうひとりの警察官です」

「その人もピストルをもっていたんですか」

「丸腰でした。その場で銃をもっていたのは、私とお父さんだけです」

矢吹は不思議そうに鮫島を見つめた。

「ではなぜ先にあなたを撃たなかったのだろう。あなたを撃って、それからその警察官を撃てばよかつたんだ」

鮫島は無言だった。

「父は、あなたが撃つことをわかっていた。暴力団ならともかく、同じ警察の人間が撃たれるとわかって、あなたが見過ごす筈はない」

「わかりません」

わずかに間をおき、鮫島は答えた。

矢吹は煙草を吸っていた。

「お父さんは大量の出血をしながら尻もちをつきました。私はすぐそばにいき、しっかりとしろ、といました」

「撃っておいで？」

矢吹の目が皮肉げにみひらかれた。

「そうです。お父さんは瞬まばたきし、何かをいおうとした。『何だ、何だっ』と私は叫びました」
矢吹が煙草を唇から外した。真剣な表情になっていた。

「『あ』と、お父さんはいいました」

「『あ』？」

「ええ。ですがそれ以上は聞けなかった。血を吐いて、お父さんはじくなった」

矢吹の顔から表情が消えた。

「それだけですか」

「それだけです」

矢吹の煙草をつかんだ手が上着に戻った。

「そういえば、『明子か』と私は訊きました。最期の瞬間に、女性の名を呼んだのか、と」

「でも返事はなかった？」

「ありませんでした」

矢吹は黙って足もとを見つめていた。右手は懐ふとろろにさしこんだままだ。その姿勢に、鮫島は違和感をもった。足もとから、不意に冷気が這はいがつてきたような気がした。

矢吹が目を動かした。

「結局、その警察官の人は無傷ですか」

「無傷です」

「その人の名は何とこののですか」

鮫島は首をふった。

「申しわけありません。それはいえません」

「どうしてですか？ 私がその人に父の復讐をすることで？」

「あなたが復讐をするのなら私だ。お父さんを撃つたのは、私なのですから。その人の名をいえないのは、もう警察官ではないからです」

矢吹の目が鋭くなった。

「やはりかばうんですね」

「そうではありません。私とその警察官は古い知り合いで、どちらかというところが合うほうではなかった。彼の、毒をもって毒を制するという発想や、国家権力を超える力はない、という考え方には、私は反対でした」

「なのに名前を教えられない？」

「申しわけありません」

「それがあなたの生きかたか」

「それほど大げさなものではありませんが」

鮫島は矢吹を正面から見つめた。

「お父さんがなぜ、先に私を撃たなかったのか。そして最期に口にした『あ』という言葉の意味を、私もずっと考えていました。しかし答はわからないままです」

「ひとつ目の問いには答がでている。あなたもそれをわかっている筈だ」

矢吹は厳しい口調になっていった。鮫島は首をふった。

「その答が、私が考えたものと同じなら、私は、お父さんを許せない」

「許せない？ 許せないってどういうことです。父を殺したのはあなただ。殺しておいて許せないというのは、おかしくないですか」

矢吹の声が高くなった。

「お父さんは、私の手を使って自殺する道を選んだ、というのが、さっきの答です。そうであるなら——」

「そうに決まっている」

矢吹が鮫島の話さえぎった。

「父は、あなたに撃たれて死ぬ道を選んだ。自分の頭を撃つこともできただろうが、それでは、警察と暴力団の密約を暴くことはできない。市場を奪われ、好きな女も失って自殺した、でかたづけられてしまう。だからあなたに撃たれる道を選んだ」

鮫島は深呼吸した。

やがて矢吹が訊ねた。

「なぜあなたにそうさせたか、わかりますか」

鮫島は無言だった。

「答えて下さい。その答もあなたの中にある筈だ」

「お父さんにとって、あるべき警察官の姿というものがあり、それに私が近いと思ったから、でしょうか」

「その通りですよ。父はあなたを警官として高く評価していた。だから介錯を望んだのです」

鮫島は矢吹を見すえた。

「生前、お父さんと会っていたのですか」

「ええ」

矢吹は平然と答えた。

「小学校高学年から音信不通になったというのは嘘ですか」

「気づいていたろう、途中で」

矢吹の口調ががらりと変わった。

鮫島は息を吸いこんだ。

「何者なんだ、あんた」

「息子みたいなものさ。あの人に英語や日本語を教わった。ポルトガル語は、俺が教えた」

「日系ブラジル人か」

「何人でもいい。去年、俺はあの人に任された仕事で、ずっとアメリカにいた。だから、あの人を助けられなかった。だが、電話はもらった。あんたに撃たれる前の日だ」

「何と聞いていた？」

「『清算するときが来たようだ』と。俺は無茶はしないでくれ、と頼んだ。すぐに日本に帰りはかったが、メキシコの連中とトラブっていて、身動きがとれなかった。直後にパケられてな。メキシコの警察と話をつけるのに半年近くかかっちゃった」

「復讐しに日本にきたのか」

矢吹は答えなかった。右手を懐ろに入れたまま、短くなった煙草を吸い、地面に落とすと踏みにじった。

「明子のことだけだな。あの人にとって、明子は、あくまでも身代わりだった。手をださなかったのは、それがわかっていたからだ」

「遠藤ユカのことをいつているのか」

鮫島はいった。矢吹は、おやというように眉を上げた。

「知っているのか」

「彼がイラン人窃盗団を率いていたとき、同棲していた女性だろう。中国マフィアが彼女を襲った場に居あわせた」

「モハムッドが死にかけた件だな。あんたに助けられたと奴はいつてた」

モハムッドは間野の手下で、命がけて遠藤ユカを守ろうとした。

明子は、遠藤ユカにそっくりだった。

遠藤ユカは、間野が逮捕を逃れるために日本を離れたあと、故郷に戻り結婚している。

鮫島は首をふった。

「逆だ。私と彼女が中国マフィアに囲まれたところに飛びこんできたのがモハムッドだ。モハムッドは銃を乱射して、中国人を撃ち倒した。私ひとりだったら、遠藤ユカを守りきれなかった」

思いだした。遠藤ユカは、美しいが物静かな女性だった。間野との交際の結果、自分にふりかかったできごとに対しても、恨み言のような言葉は一切、口にしなかった。

間野に対して「好きだとか愛している」という感情はもてなかったが、安心していっしょにいられる、と感じていたと鮫島に告げた。

「いごこちのいい『隠れ家』みたいな人でした」と、いい、間野がもう日本にいないと知ると、不意に涙をこぼした。

明子は、その遠藤ユカとは外見こそ似ていたものの、まるで異なる性格をしていた。

——わたしは花じゃない。飾っておいて、眺めるだけなんて嫌です。

銃撃戦の直前、明子が間野に向け放った言葉だった。

間野は呆然とそれを聞き、後悔と苦渋の表情を浮かべた。

「あの人の最期の『あ』は、明子の『あ』じゃない」

矢吹がいった。

右手が懐ろからひきだされた。まだ煙草の箱を握っていた。左脇に、わずかだが不自然なふくらみがある。着ているスーツの左右の幅が微妙にちがっていることに鮫島は気づいた。

それ用に仕立てたスーツなのだろう。

新たな一本に、矢吹は火をつけた。

「何の『あ』だというんだ」

鮫島の声がかすれた。矢吹は無言で煙草を吸っていたが、やがて、

「オブリガード」

とつぶやき、

「話は終わりだな」

つけ加えた。右手を軽く上げた。

シボレーの黒い大型バンが離れたところから走り寄ってくるのが鮫島の目に入った。

鮫島の車の前で停止すると、後部のスライドドアが開いた。

矢吹は上着の胸ポケットからサングラスをとりだすとかけた。黒いレンズが鮫島を向いた。

「あの人がそういった人間を殺すわけにはいかない。じゃあな」

シボレーのスライドドアが閉まり、発進した。その黒い車体が霊園を抜ける道を遠ざかる。

鮫島はそっと息を吐きだした。知らぬ間に息を止めていたのだった。

踵を回らし、間野総治の墓所をふりかえった。

本当にそうだったのか。

怒りと悲しみがまざったやりきれない気持がこみあげた。

だがそんなことは永久にわからない。そうであつたか知らなかったかを知ることには決してな

い。

自分にいい聞かせ、車の鍵をポケットからとりだした。